

炭焼小五郎がこと

入江 秀利

「朝日さし 夕日かがやく この丘に
黄金千ばい 朱千ばい」

臼杵の祖母がよく炭焼小五郎の話をしてくれました。この詩は今でも耳の底にあります。母に手を引かれ石仏や満月寺のお詣りによく深田の里を訪れました。

幕末に、ある男が蒲鉾形の金塊を掘り当てて外国人に売り、それが発覚して牢獄に入れられました。維新の恩赦で釈放された、という話も聞かれています。満月寺の境内にある宝篋印塔（日吉塔）のそばに、宝探しに掘られた大きな穴を見たことがあります。石仏が国指定特別史跡に指定されてから、深田の里の見方が変わりました



が、少し前までは「黄金千ばい、朱千ばい」の夢が漂っていたようです。

「有智山略縁起」があります。この縁起は百済から招かれた蓮城法師が、本尊の千手観音を捧持して、三重の内山に有智山精舎を開くに至った物語で、その資金は炭焼小五郎（真名・真野長者）の錬金術がもたらしたものであることを説いたものです。この錬金術をモチーフとした話は、豊後の「炭焼小五郎」を元祖として他の地方にもあります。

豊後の「炭焼小五郎」（真名長者）話の結末部は、室町時代初期に書かれた幸若舞の「烏帽子折」の詞章で、山路と宇佐八幡神の関係で別の展開が見られます。

愛娘の般若姫を失って悲しみに沈む真名長者夫妻が、姫の供養のために紫雲山満月寺を建立し、丸彫の見事な磨崖仏を彫ったといわれます。

※有智山略縁起 内山蓮城寺の縁起

※蓮城法師 長者に招かれて三重に来て蓮城寺の開基になった、唐の天台山で慧恩大師に学んだ百済の高僧

※幸若舞 室町時代初期に起こった舞曲。戦国武将に保護され、幸若舞が舞曲の代名詞になった。

一 炭焼小五郎の物語と構成

昔、豊後国三重の玉田の里に藤治という子供がいました。三歳で父に、七歳で母に死に別れ、内山の炭焼又五郎の養子になりました。養父母がこの世を去った後は、名を小五郎と改めその跡目をついで炭焼をしていました。

そのころ、奈良の都に久我大臣の娘で玉津姫（玉世）というきれいな姫がいました。姫は年頃になると、顔一面に黒い痣ができて醜い娘になりました。姫は、日頃信仰する三輪明神によい縁が授かるようにと、二日間お籠（こもり）して祈りました。満願の朝、夢の中に神が現れて「豊後三重の里に炭焼小五郎という者がいる。この者と夫婦（みょうと）になれば末は長者になるであろう。」とお告げがありました。

姫は明けて十六歳の春、ひそかに京都を抜け出して豊後に下り、三重の里の松原に着きました。日暮れて道に迷い途方にくれていると、一人の翁（おきな）に出あいました。姫が三輪明神のお告げで炭焼小五郎を尋ねて来たことを告げると、翁の家に案内されました。翌朝、翁は姫を小五郎のあばら屋に案内するとたちまち見えなくなりました。

間もなく手足も顔も真っ黒な若者が帰ってきました。

「筑紫豊後は臼杵の城下

藁で髪ゆた炭焼小ごろ」

姫が小五郎に神のお告げを告げると、小五郎は驚いて「貧乏で養うことができない」と断りました。夫婦になって姫が小五郎に小判を与えて、食べ物や道具を買い求めてくるように頼みました。やがて小五郎が手ぶらで帰ってきたのでわけを尋ねると、淵で水鳥を見つけて投げたと答えました。

「おし（鴛鴦）は舞い立つ小判は沈む」

姫は小五郎の無知に驚いて「あれはこの世の宝で、あれがあれば何でも求めることができる。」と咎（とが）めると、

「あんな小石が宝になれば

わしが炭焼く谷々に

およそ小筧（こざる）で山ほど御座る」

と、小五郎は姫を伴って山にはいり、金亀ヶ淵（きんき）に行くとき黄金（こがね）で一杯でした。

また、二人がこの淵で体を洗うと、姫は痣（あざ）がきれいに落ちて元の姿に戻り、小五郎も好青年になりました。

大金持ちになった夫婦は唐船から宝を買い集め、四方に萬の蔵を建てました。人々から「萬の長者」「満野長者」「真野長者・真名長者」と呼ばれました。

小五郎は仏教を深く信仰して、黄金（こがね）三万両を唐の天台山上に

寄進したところ、百済の高僧蓮城法師が千手観音を捧持して来日し、有智山（内山）蓮城寺の開基となりました。

四十歳になっても子宝に恵まれなかつた長者夫婦は、内山聖観音に願をかけて般若姫を授かりました。



般若姫が十四歳になったとき、都から姫を帝（用明天皇）の后に欲しいので内裏に連れてくるように命じられました。が、長者は断りました。内裏は無理難題を出して般若姫を後に迎えようとはしましたが、長者は財力にものをいわせて難問をことごとく解決しました。

たまりかねた帝は自ら三重の内山を訪れ、牛飼に姿を変え長者の家に住み込んで機会をうかがっていました。しばらく働いているうちに身分が分かり、驚いた長者は般若姫との結婚を許しました。

やがて、都から帰京するようにとの使いがきました。帝は「生まれた子供が男なら都に連れてくるように、女なら長者の跡取りにせよ」と言い残して都に帰りました。

般若姫は女の子を産んで玉絵姫と名づけ、約束通り般若姫は玉絵姫を家に残して都に登ることになりました。長者夫婦は白杵の姫見岳に登って船団を見送りました。

姫は途中で嵐に遭って姫島に上陸し、船団を整えて出帆しましたが、周防灘で再び嵐にあい亡くなってしまいました。後に般若姫が遭難した山口県平尾町に蓮城が般若寺を建立したといわれます。

長者夫妻は般若姫の死を悼み、深田の里に満月寺を建て周りの岩に磨崖佛を彫りました。

「炭焼小五郎」の話は語り手によって千差万別です。ここではできるだけオリジナルと思われるものをあげてみました。

※鴛鴦 おしどり。水鳥の代表

この話にモチーフが三つあるようです。

第一は炭焼にかかわるもので、玉津姫が小五郎を訪ねて、黄金の価値を教える最もポピュラーなモチーフ。

第二に小五郎が長者になって佛心を起こし、蓮城寺を建立するという有智山蓮城寺の縁起にかかわるモチーフで、オリジナルでは真名長者が般若姫の死に直面して諸行無常を感

じ、石仏や満月寺を建立するというモチーフになっています。

第三のモチーフは前述のオリジナルにはありませんが、般若姫が用明天皇と関わりをもつ内容になります。幸若舞の「烏帽子折」に仮託かたくされてやや異なるモチーフが展開されます。

○ 炭焼きにかかわるもの

小五郎の「炭焼」が、たんに木炭造りだと考える人はないでしょう。このお話の設定は、小五郎が金属を精錬するため木炭を作っていたか、または炭焼きそのものが金属の精錬を意味するものと考えられます。

この「炭焼」のモチーフには、

第一に、貧しい若者が、山中で一人炭を焼いていた。

第二に、都から貴族の姫（娘）が、信仰する観世音（三輪明神）のお告げによって、押しかけ女房にやって来る。

第三に、炭焼の若者は嫁から小判か砂金（金塊）を貰って買い物に行き、途中で水鳥を見つけてそれを投げつける。

第四に、姫にたしなめられて、小石が黄金こがねであることを知る。そして二人は沐浴して端麗になる。

という四つのモチーフがあります。

柳田国男の『南海小記』には、右の四つのモチーフのうち

少なくとも三つまで備えた話が、津軽の岩木山の麓から鹿兒島の鹿屋まで十いくつもあり、更に沖繩の宮古島まで類話があると書いています。中でも「小五郎」の話にそっくりの四か所の炭焼長者の名前は、「藤太」になっています。豊後の小五郎も幼名は藤治ふじぢです。

この「炭焼」の話が鍛冶、鑄物師いものしの伝承と関係があり、宇佐八幡の神話（後述）も最初これと極めて近いものであったろう、というのが柳田国男の説です。黄金こがねは鉞物を代表する金属ですから鍛冶の起こりを象徴する説話だといえるでしょう。

樋口清之は「この説話は甚だしく中世後期の長者伝説的要素が強く、むしろこの炭焼は、精鉄、鍛鉄たんでつや精金技術と関連したもので、炭片や鉄滓てつさいが出土する長者屋敷といわれる場所に結びついている場所が多い。製炭を伴った移動鍛冶の遺跡に発生した説明説話の一種と解することができる。」といます。

深田の里にも小五郎が焼いたという炭竈の跡があり、岩くずの間から炭の残片が無数に出るそうです。木炭の残片が出る場所は、タタラ跡のような金属鉞石の精錬に関係が深い場所だと思われれます。

『三重町史』の「炭焼小五郎伝説」によると、「古くから蓮城寺には箕淵、釜淵を金銀鉱石採掘の跡とする伝承があり、小五郎が水鳥に黄金を投げたという金亀ヶ淵は、その川尻にある」と書かれています。

また、三重郷の鉾山に関する古い記録には三重町中尾に賀井本鍛冶があり、現在でも町内に鍛冶平、タタラ、イモジなど製鉄や鍛冶に関する地名が残っているそうです。製鉄に必要な炭、砂鉄、珪石などの材料に恵まれていたことを知り得るとも書かれています。

柳田国男は、炭焼の話はおそらく三重の「炭焼小五郎」の話が元祖であろうと述べています。

よく似た話に加賀に芋掘藤五郎の伝説があります。芋掘藤五郎が芋を掘って細々と煙りを立てているあばら屋に、大和初瀬の長者の娘和五（和子）が観世音のみちびきで押しかけ嫁にやって来ました。ある時、藤五郎が和五の親から貰った一包みの砂金を田圃にいる雁に投げつけて還ってきました。藤五郎は嫁にたしなめられて山にはいり、莫大な砂金を持ち還って近くの金洗澤で洗いました。これが金澤の地名の起りで、兼六園の泉はその跡といわれます。

この種の話の伝播は、金売り吉治のように金を売ったり古

金類を買い集めたりする者や、諸国を回って砂鉄や古鉄から精鉄をとる鑪師や鑄物師が「炭焼小五郎」の話をひろげ、いわくありげな淵や塚のような関わりのありそうな場所に「炭焼」の話が定着したのではないかと述べています。

このような芋掘長者の話もかなりの地方に残っているようです。砂金や砂鉄を直接に土地から採集していたのでしょうか。柳田国男は、この芋が鑄物師であろうと述べています。

○ 蓮城寺と蓮城法師にかかわるもの

延享元年（一七四四）に成立した「豊鐘善鳴録卷五」に

「日本の豊州真名原にのち満野と称す長者小五郎という者あり金三万両をせいし天台に寄す けだし福根をこころざすなり 慧（恵）思大師これを聞きてはるかに夙蘊あることを知りて すなわち城（蓮城）に命じて赤せんだんの千手千眼瑠璃石薬師の像をせいし東渡せしむ 城大洋を



躰え長者の宅に達す 長者城を礼し深く信敬を發し すなわち一字を結びてこれに居らしむ 城すなわち二尊を安じ 名付けて有智山精舎という」と書かれています。



蓮城寺は三重大字内山にあり、山号を有知山といい、現在は真言宗高野山派に属しています。大日如来を本尊とする本堂、千手千眼觀世音菩薩を本尊とす大悲閣、境内には薬師三尊を主尊とする旧高一寺の薬師堂があります。

また「有智山略縁起」によれば、欽明天皇一五年(五四六)、百済の僧蓮城法師が持参した千手千眼觀音と百済僧が持参した般若姫の持仏をお祀りしたと伝えられます。蓮城寺の開基は蓮城、創始者は真名長者小五郎とされています。

蓮城は百済の僧で若くして随に遊学し、天台山の慧(恵)思大師に学んだといわれます。蓮城寺を開基した後に、深田莊に祇陀・療病・施薬・安養・快樂の五院を備えた紫雲山満月寺を建立したといわれています。その後、伊豫国に大山寺、周防国に般若寺を建立して、推古天皇二四年(六一六)に入滅しました。

豊聡太子(聖徳太子)は蓮城の徳行を賞賛して「蓮城寺」の額を揮毫して有智山精舎に寄進したといわれます。

一説に、敏達天皇の招きで来日した百済の僧日羅が建立したといわれます。日羅はわが国の仏教・政治の発展に力を尽くしましたが、反対する勢力に暗殺されたといわれます。

日羅は朝地町の普光寺の不動三尊や緒方莊に七ヶ寺を建立したといわれます。

蓮城も日羅も渡来僧で伝説的人物という説もあります。ただ、蓮城は有智山精舎縁起に名前が出ますが、日羅が普光寺や七ヶ寺の建立者であるということは、元徳三年(一二三二)の文書に書いてあります。

蓮城寺は、史料としては文治元年(一一八八)に、内山寺(蓮城寺)の住職であった大法師基覚が院主職の覚仁に譲った書状に、平安時代の後期にはすでに建立されていたことが分かっています。

なお、蓮城寺にある千体薬師堂は、もと有命山高一寺と称して蓮城寺に属していました。薬師如来と小佛薬師如来一〇〇八体を祀っています。堂は天正年間には建立されていたことが分かっています。

○ 般若姫(玉よの姫) にかかわるもの

真名長者まなながが帝みかど(用明天皇)を般若姫(玉よの姫)の婿にする糸いとりについて、幸若舞の「烏帽子折えぼしおり」の詞章に次ぎの展開があります。

牛若丸が金売り吉次に連れられて奥州へ下る途中、青墓の宿で牛若丸が吹いた「草刈の笛」を聞いた遊女の長おさが遊女達に、真名長者の婿になった山路さんろの笛の話をしめます。

昔、都の帝(用明天皇)は十六歳になってもお后きさきがいませんでした。心配した公家や殿上人は、六六本の扇に美しい女人の姿を描いて国々に送り、お后をさがしました。ところが、豊後の国の「ま※の長者」の娘に、観音様のお告げで授かった「玉よの姫」がおりました。姫君は扇の絵が妬うらやむほどの美しさでしたので、帝は早速勅使を下しました。しかし、長者は宣旨せんじをお断りしました。

内裏だいりは長者が断ることのできないように、「芥子けしの種子一万個を今日中に納めよ」とか、「浄土の蓮の糸で織った両曼荼羅を献上せよ」などと無理難題を吹きかけます。芥子は女房に十萬石の蓄えがあり、曼荼羅は聖観音が長者のために自ら織ってくれて見事に解決しました。帝は「長者は佛であったのか」と驚きますが、恋心はいかんともし難く、帝位も惜お

しくないと豊後へ下向げこうしました。

帝は山路さんろと名乗りました。縁あつて長者の牛飼になり、手に負えないあめ色の牛をまかされます。帝は牛を曳いて野に出ますが、草刈りができないのでいつも牛に寄っかかり、姫への思いを込めて横笛を吹いていました。牛飼達は妙たえなる笛の音に聞きほれ、山路の草刈りを引き受けて笛を所望たもとしました。この笛の曲が「草刈り笛」です。

帝がいなくなつた都では、陰陽道おんようどうの博士をあつめて帝の行衛うづゐを占うらわせました。陰陽師は「宇佐八幡の御前で放生会ほうじょうえを行い、まの長者に神事を勤めさせれば帝は都に戻るであろう。」といいました。

長者は放生会を引き受けましたが、流鏑馬やぶさめを全く知りませので、都育ちの山路に、「流鏑馬を立派に勤めれば玉より姫の婿むすめにし、財たからの倉も与えよう。」と頼みました。

放生会の日、山路が美しい衣装を付けて、栗毛の馬に乗つて現れました。一の的、二の的と進み三の的にかかると、神殿にわかが俄に振動し、白い水干すいかんに烏帽子えぼし、金の杓しゃくを持った八幡神が顕あれました。神は白州かしこに畏かしこまって、「天下の帝がおん自ら神事をおつとめになるとは、これではわれわれの苦しみが増すばかり。今はもう都へお帰り下さい。」と申しました。

長者は驚いて「帝を三年も召し使ってしまったとは」と後悔しましたが、帝は「今は姫を差し出すがよい」と宣われ、宇佐八幡に結ばれた二人は連れだつて都に還りました。

その後、帝と玉よ姫は聖徳太子という御子をもうけられました。玉よ姫は聖観音、用明天皇は阿弥陀如来、聖徳太子は救世観音の化身でした。(京都大学電子図書館・お伽草子「烏帽子折」抄)

※玉よの姫・まの長者 玉世姫方の長者のことです。「烏帽子折」に次のようにあります。

つくしぶんごのくにうちやまと申ところ、ちやうじや一人あり、四ほうに四まんのからをたててすめば、四萬のちやうじやと申せしを人の申すきまに、まのどのとこそ申けれ。(「新群書類従」第八舞曲の部)

※両曼荼羅 胎蔵界、金剛界の曼荼羅

二 八幡信仰と小五郎

柳田国男は神は卑賤な姿をしているが、清純な乙女を訪ね寄りその真の姿を顕すといっています。神は巫女とのかかわりの中から顕れるという話は、鍛冶の翁が大神比義(柳田は巫女と推定する)によって、神として顕れるということが託宣集

第五卷にあります。蓮城寺にまつわる小五郎(鍛冶の神)と玉津姫(巫女)の話は、八幡の古くからの信仰から生まれた物語とみえます。

硬い金属を思うままに扱ひ色々な形に作る能力を持つものは、樹を焚いて炭を作りタタラを踏む術をもつ鍛冶の神だったのです。清純な姫と沐浴して真の姿を顕すことになったのでしよう。

「炭焼小五郎」の話はタタラの神による鍛冶、練金の起りを示す説話だと思えます。

「烏帽子折」は、山路(用明天皇)が玉世(靈託、巫女)を訪ね寄られるという話、真名長者に宇佐八幡の放生会を主催させて、現人神の山路に流鏑馬をさせて奇瑞を顕し、その結果、佛法最初の保護者聖徳太子を誕生させるなど、神仏習合の宇佐八幡宮にかかわり深い話になっています。

大野、海部郡に宇佐八幡信仰が根強く伝播している事について、中野幡能博士は、「寛平七年(八九五)頃から、大野氏と宇佐氏との間に宇佐大宮司職をめぐる争いが絶えず、寛治年間(一〇八七)より宇佐宮は宇佐公順に奪われてしまいました。宇佐を追われた大神(緒方)氏は大野郡に入り込み、当地で日羅信仰を起こした天台宗僧侶の援助を受けなが

ら、八幡信仰をひろめたのでしよう。

炭焼小五郎が創設したという伝説をもつ蓮城寺の開基について、日羅律師か蓮城法師かの問題はありますが、創建時に当寺が八幡宮と関係の深い天台宗であったことは否定できないでしょう。炭焼小五郎伝説も、内容といい伝播者といい宇佐八幡信仰に本源があることは、ほぼ間違いない。といわれています。

※ 宇佐の託宣集第五卷 「宇佐菱形池の辺に鍛冶の翁があり、奇瑞（不思議）を現すので大神比義が三年祈ると、三歳の小児の姿を現して我は菅田天皇（応神）なり、とのりたまう」という

三 臼杵石仏造立の財源は

莫大な財力と労力を費やした石仏は、黄金こがねを掘り当てて長者になった小五郎の手になるというのは附会であって、現在、残っている磨崖仏を造った経済力はどこから生まれたのでしょうか。

大胆な仮説を立ててみました。

「黄金千ばい 朱千ばい」、子供の時はなぜ朱（丹）が黄金と同じ価値を持つのか不思議に思っていました。



古代の朱には、赤鉄鉱を粉碎して作るベンガラと辰砂しんしゃ（丹）の水銀朱（硫化水銀）があります。辰砂（赤色水銀鉱石）は加熱すると水銀に

なります。水銀は金・銀・銅と合金しやすいので金や銀の合金を利用して※トッキ鍍金（メッキ）に使われました。奈良の大仏をはじめ多くの金銅仏に用いられ、仏教の興隆とともに水銀の需要も増えました。また辰砂は朱色の発色がいいので寺社の塗装や壁画などに盛んに用いられました。

『豊後風土記』のあまべのこおりに海部郡丹生の郷の条に

「昔時むかしの人、此の山の沙すなを取りて朱沙しゆさにあ諺よてき。因りて丹生の郷さとといふ」とあります。また、『続日本記』文武天皇二年（六九八）九月の条に、豊後国から朝廷に真朱（辰砂）が献されたと書いています。また『豊後国誌』にも北海部の産物の中に朱沙（丹生郷）があります。真朱が特産だったことを示しています。

昔は施朱せしゆという風習がありました。古代では古墳の石室

の壁や石棺の中を赤く塗り、ときには遺体に朱を施したり、祭祀土器や土器には赤く塗られたものがあります。また柱や壁に朱が塗られた寺社もあります。

宇佐八幡宮は朱色を基調としています。中野幡能先生がご生存中、宇佐神宮と朱についてお尋ねしたことがあります。あれは魔除けの色ですといわれました。丹生の朱と関係があるのではないかと思います。

朱には魔除けの呪力があるといわれます。だから古代の日本人にとって朱はなにより大切な貴重品でした。

辰砂がとれる場所を水銀鉞床といい、主に大和鉞床群と四国阿波鉞床群と九州南部・西部鉞床群があります。どの鉞床群にも「丹生」という地名や「丹生神社」が分布しています。

空海が遣唐使になる前の七年間山岳修業していた時に知



り合った渡来集団の丹生一族と行動を共にして、四国阿波鉞床群で辰砂から水銀を精錬する冶金術をならったと云われます。

大分県の九州南部鉞床群は「丹生の郷」といわれています。地図の大野川右岸と北海部の広範囲で、十一世紀のはじめごろ白杵一帯は丹生津留と呼ばれていましたので、大野郡や北海郡が「丹生の郷」だったようです。

「丹生の郷」の辰砂採掘採集団は丹生の地名もあり丹生氏であろうと考えられます。

阿波鉞床の水銀鉞床から、辰砂を砕くために使った石臼や石杵が出土するそうです。丹生津留で採掘された辰砂や水銀の中心的な精錬工房があったから白杵（石臼・石杵）の地名がついたのではないのでしょうか。

白塚古墳の墳頂を飾る単甲形石人（石甲）二基を白と杵に見立てて「白杵」という地名が起ったといわれているが、石甲を白と杵に見立てるのは難しい。むしろ白杵という地称は白塚古墳の名が付くより以前からあったと思われる。

またその表面からわずかながらも朱の痕跡が認められ、造られた当初は全面に朱が施され



たさぞかし鮮やかな武人像であったと想像されます。

臼杵石仏を造立した制作者か団体の膨大な財源は、辰砂（水銀）の生産ではなかったでしょうか。

「丹生の郷」にあった辰砂の採掘遺跡や精錬遺構、古記録があれば是非保存しておきたいものです。

※ 鍍金 水銀と化合させて銅や青銅の仏像に塗り、後に炭火で焙とって水銀を蒸発させて金の鍍金と（メッキ）をします。

辰砂を熱してとる水銀精錬の前は、坑壁や坑底から汗のようにじみ出てくる天然水銀を集めていた。

炭焼小五郎、真名長者、連城寺、姫、鍛冶、山路、宇佐八幡、辰砂、朱と想いは尽きません。 完

参考文献

『海南小記』、『三重町史』、『炭焼小五郎伝説HP』、『大分の歴史宇佐八幡と石仏（二）』、『日本民俗文化大系（三）』 稲と鉄、『お伽草子』（京大 電子図書館）、「蓮城寺（HP）」、「豊後国丹生の郷に古代水銀朱を追う」（野田雅之『熊本地学会誌』）